



“ΝΑΕΟΖ 1976, Μαζεύοντας ελιές.”
(NAXOS 1976, Harvesting olive)

出典：Robert A. MacCabe, *ΕΛΛΑΔΑ, 1954-1965*. Athens, 2004.

時空の交差点 (43)

大月 康弘

島の暮らしは、古来、自然とともにあった。地中海性気候に属するエーゲ海の島々では、三月から九月まで降雨がない。だから、九月半ば頃から降り出す慈雨への欲びはひとしおで、オリヴ栽培を生業とする村は、初秋のこの時期、一斉に活気を取り戻す。

オリヴの樹の生育には、年間数百ミリの降雨量があれば充分である。灌水する必要もなければ、施肥も不要である。ただ、野生のオリヴの樹に、手を掛けて育てた栽培オリヴの枝を継木してやらないと、立派な実がつかない。手間といえど手間だが、手慣れた島民にすれば何ほどのことはないようだ。

オリヴの実が熟して木から落ちはじめのは、十月末から十一月。この時期になると、どの家族も一家総出で収穫に当たる。ロバにカゴを背負わせ、所有する栽培地を巡回しながらオリヴの実を集める光景は、ナクソスばかりでなく、ギリシャの島では今日なお決してまれではない。

ナクソス島は、二一から成るキラデス群島のなかで最も大きく、種子島とほぼ同じ面積をもつ。大理石の産地として有名なこの島にも、オリヴ栽培地はそこかしこに存在する。水資源に乏しい島の生活を支えてきた淡緑の風景は、この世界の生態系に規定された生業が創り出したものなのだ。

港町コウラから小一時間、海拔四百メートルほどにあるフィロティ村は、かつて筆者の恩師たちが農村調査をした集落である。二一の村落と、それとほぼ重なりあう二七の教区をもつナクソス島にあって、そこは、ザー山(別名ゼウスの山)の南斜面に位置して同島最大の面積を占め、人口は千人を超える。

近年のどかな光景を求める旅人が、夏場を中心に集うようになったとはいえ、標高千メートルを超えるザー山の裾野に点在するオリヴ栽培地と、その隙間を行き交う山羊の群れは、今なお村の原風景そのままである。

一九七八年に調査隊が入って間もない初秋のある日、「プレヒ! (雨だ!)」と叫びながら村人たちが踊り出したという。待望の慈雨を全身に浴びながら、村びとたちの心が輝きだした瞬間だったにちがいない。(一橋大学教授・経済史)

中国との戦略対話への道

石井 明

中国に『東周列国志』という歴史小説がある。明代に馮夢龍が改訂し、清代に蔡元放が再改訂した。扱っている時期は紀元前七八九―二二一年。当時は春秋戦国時代で、周王朝の力が弱まり、諸侯が割拠していた。外交とは、一般に横並びの主権国家間の関係に見られる現実なのだが、この五〇〇年間、中国では幾多の諸侯が覇権を求めて相争い、治乱興亡が繰り返されており、諸侯の関係は横並びで、外交があったと考えられる。この小説は、秦の始皇帝が覇者となり、郡県制をしき、縦の関係が中原に成立するところで終わるのだが、圧倒的な覇者が現れるまでは、諸侯は外交によって国力の弱さをカバーし、国益の増進を図ろうとしていたのだ。

どこかで、この長編小説は中華人民共和国の外交官の必読の書だと聞いたことがある。一体、どんな本なのか。この書、途中、どこから読み始めてもよいし、どこでやめてもよい。一端を紹介しよう。

【創文】 534号/二〇一〇・九

●時空の交差点 43

プレヒ!

大月 康弘

中国との戦略対話への道

石井 明 1

CSRとグローバルな正義

神島 裕子 6

鈴木成高先生との思い出

―その著作とともに―

根占 献一 11

慈雲さんのこと

―ハンガリーのギリシア・カトリック教会に寄せて―

秋山 学 15

●思い出の経済学者たち 3

D・H・ロバートソン教授との

シエリー酒

市村 真一 19

「シナ五大道楽」の伝道師・井上紅梅

―「シナ通」列伝その二―

相田 洋 21

出版案内

〔表紙〕

串田 光弘

ば、「戦略」としてはCSRの推進を経営戦略の中核に設定するところが求められるだろうし、「制度」としては企業内組織および個人の評価項目にCSRの達成度を付け加えることが必要だろう。これがないと実行が伴わない。営利企業で働く従業員は、基本的には評価の対象にならない仕事はしないからである。「組織構造」としてはCSRを推進できる組織体系を構築することだろう。実際は「CSR推進室」といった組織が置かれる場合が多いようだが、影響力・発言力の強い部署が必要かもしれない。「価値観」としては従業員がCSRに対して共通の価値観をもつことだろう。「人材」としてはCSRを実行できる人材が揃っていることだろうし、「技術」としてはCSRを実行できる技術力が備わっていることだろう。これについては、自然環境の保全という観点では、ある程度条件が整いつつあるのかもしれない。電気自動車の開発や環境負荷の少ない商品の開発などが積極的に推進されているからである。「社風」としては組織文化として社会正義の実現をめざすことだろう。この要素の熟成には時間がかかるだろうが、社風として定着してしまえばCSRの強力な推進要素となりそうである。

これらのうち最も重要な要素は「価値観」ではないだろうか。正義にかかった社会を創造するという共通の価値観が醸成されてはじ

めて、CSR活動はより本来的・安定的なものとなるだろう。だが、そのための大前提として総じて求められているのは、すべてをビジネスの一部として見なすことを差し控えることのできる、正義感のある人材である。そうした人材をどこでどのように育成すればよいのか、言うまでもなく最大の難問である。

(1) ジョン・ロールズ「正義論」改訂版(川本隆史、福岡聡、神島裕

子訳)紀伊國屋書店、二〇一〇年一月刊行予定。

(2) 図の作成に当たっては、グロービス・マネジメント・インスティテュート編「MBA経営戦略」ダイヤモンド社、一九九九年、一八〇頁などを参照。

(かみしま・ゆうこ 中央大学商学部助教/政治哲学・国際倫理学)

鈴木成高先生との思い出

——その著作とともに——

鈴木成高先生(一九〇七「明治四〇」年—一九八八「昭和六三」年)が私の名をお知りになり、最初に言われたことは、相撲取りに「大根占(おおねじめ)」が居たということであった。根占(彌寛。源順編「和名類聚抄」に出典)という字句を知らない方にはとても珍しいらしく、同じ体験はある折、堀米庸三先生との出会いでもあった。あなたの名字はいずれの地に関わるのか、と。そのような問いかけであった。堀米先生には鹿児島島の「入来文書」についてのエッセーがあるが、きっと精読されたわけではなかったであろう。あとでこう考えてみたのは、この世界的に知られる入来院氏史料の中には根占氏一族の名も見出されるからであった。

鈴木先生の場合は珍しい名ということながら、先生の多様な関心を示していたと推察する。それは先生にじかに接した人が一様に感じるであろう。今は町名として消えてしまった大根占町(現錦江町。「小」根占町もまた消え、南大隅町を形成)出身の幕内力士大雄(横山(旧姓柳田)。一九五六年五月場所初土俵)の最初

の四股名が出身地名だったのである。よほど先生は下っ端のころからご存じだったのである。あのころ、「少年マガジン」だったか、あるいは「少年サンデー」だったかに、関取に昇進する前の彼が紹介されていて、「だいこんうらない？」と記事になっていたことを覚えていて、今相撲界は巨下たいへんな状況となっている。先生なら、また的を射る発言をされるに違いなく、このような時事的発言は実に味わい深かった。

現在私は、学部時代に講義で出会ったころの先生の年齢に達している。廊下を歩むと軋む木造校舎があった。昨春秋、母校早大の史学会(評議員会)のおり、この年から初めて評議員となった日本中世史の新井孝重獨協大学教授と、ほぼ三〇年ぶりに再会した。最初は誰か分からなかった。彼のほうが先に気付いてくれた。菱わり様が激しいものの、声音は同じだった。かつて黒田庄の悪党を熱く語ってくれた彼は、私に中世史における「彌寛文書」の意義を説いてくれたひとりだった。石母田正「中世的世界の形成」を読む気にな

根占 献一

ったきつかけは、新井氏の影響が多分にあるだろう。

その彼が、「外国語がもう少しできていたら、西洋史学科に行く気があった」といい、鈴木成高先生の『封建社会の研究』に痺れた、あれは名著だ」と、変わらぬ声で力説した。青春時代の読書は後々まで記憶化される。この書に頻出するアルフォンス・ドブシュの名もすらすらと出てきた。彼の恩師は竹内理三博士であり、私も他大学の院生に勧められて竹内先生の授業を取った。これもまた木造校舎で行われた。お二人の講義は対照的で、竹内先生が講義ノートを読み上げる方法であったのに対し、鈴木先生のほうは講義の控えはあったものの、これから離れて時に雄弁で、レトリックの効いた話の進め方をされた。

手元に、その『封建社会の研究』（弘文堂書房 一九四八「昭和二三」年）の原著がある。講義同様力強く、リズムミカルな文体で綴られている。そして出版年を反映した個所が見出される。西洋中世の土地賃借の歴史的变化に触れるところで、「このことは即ち農民の解放であるといえる。現下農地法改正下においてみられる日本の農村における地主と小作との関係もまたこれに近きものがあるということができであろう」（六一七頁）、と。また「まえがき」には世界大戦のために「学問的鎖国状態」とじ込められ、欧米学術情報途絶えてしまったと記され、本書が「だいたい一九三九年頃を最後とする状態において纏められた」（五頁）と断られている。

この書は、「前篇 封建社会の成立と構造」と「後篇 封建社会

演習はこれらのことに費やされていたように思われる。ただし『封建社会の研究』にも先生の精神的嗜好が表れていないとはいえない。それは中世スコラ学に言及する個所に見られ、美術史家として名を馳せたヴォリンガーやドヴォルジャークの名が見出される（六一六六頁）。これらの名は授業中にしばしば先生の口から洩れた。そしてこの頁間には、書記官長の人文主義者サルターティを研究したアルフレート・フォン・マルティンの名も出る。中世世界観の構造的特色として、多才な彼の言葉である「多面性の統一」が引用されている。先生は授業中によくトレルチの「統一文化」(Einheitskultur)の表現をもって中世を説明されたが、これも同一の趣旨であったろう。先生の好みはまた、ヘヒテルやホイジンガの名が挙がるところ（四四〇―四四四頁）にも窺われよう。

ところで、この『封建社会の研究』には、まだ形を成してはいないものの、やがて個性的な書として現われる『産業革命』（弘文堂アテネ新書 一九五〇年「昭和三五年」）の萌芽が見られて興味深い。特にその後篇には、同じく軽快なテンポで叙述が進められる『産業革命』につながる箇所が散見（五三三、五七三、六三九の各頁）され、この頃の先生がなにを考えておられたかがよく分かる。その序は「産業革命はまだ終わっておらない、ということとは重要なことではないだろうか。原子力の出現は世界を震撼させたが、しかしそれによって産業革命が最終的な段階にきたとは誰も思っていない」と書き始められる。科学技術の進歩が止まらぬことが指摘される。進

と資本主義」の二部から成り立っている。そして全体の最初の章は

「一 封建制度の起源と本質」である。先生は「まえがき」冒頭で、封建制度は中世研究者すべての「義務づけられた課題」であり、「他に向かむとする興味をみずから殺して」関わってきたと説明されている。今はほとんど口の端に上らなくなったものの、日常的にしばしば形容句として「封建的」が使われ、それは前近代の、非開明的な意味で通用していた時代があった。封建制度の封建に相当する西欧原語にそのような意味があるわけではないのに、日本では長くそのようなニュアンスで日常語ともなり、戦前は封建の名残を引きずっていた。先生は「今日のごとく常識以上の放縦さをもってこの言葉が濫用されつつある現状においては、概念の混乱を防止」（一三頁）しようとする。純粹に学術的な意味で、そして文字通りに西欧封建制度の歴史的起源と本質を明らかにしようとする。本章の巻頭言に、実に、この章全体だけでなく、前篇全体の本筋を言い表す言葉を、エルンスト・トレルチから巧みに引用し、掲げられている。「ものを起源において理解することが、すなわちものを本質において理解することである」（七頁）。このように全体を見渡すためにシェーマを示す鋭さは先生独自のものである。

それでは社会経済史的研究方向ではなく、「他に向かむとする興味」とは先生にとって何であったのか。私が授業から受けた印象でいえば、それは「精神生活に関する事柄」であり、「中世国家に関する問題」であったろう。私の学生時代には大学や院での講義や

歩史観なる思想は先生から教わった。

そして本文冒頭は「われわれの住む社会は資本主義社会であり、われわれのもつ文明は機械文明である。ともに産業革命が生んだ」と書かれる。これは「第一章 産業革命とはなにか」の第一節「産業革命の文化史的意義」と題されたところにある。ここで先生は技術史家、文明史家となる。本書第三章は第二次産業革命と題され、終わらぬ産業技術の進展が詳細に論じられる。そのなかの「汽船の歴史」の節にある「船舶はその積載能力において陸上運輸機関のいかなるものよりも大でありかつ経済的である。船舶輸送のもつこの利点は、将来いかなる交通機関の出現によっても代替せられえないであろう」（一三八頁）、あるいは「通信革命」の節中の「通信革命はかくて全世界の同時化という、歴史はじまって以来の眞に世界史的なる段階をもたらすこととなった」（一七九頁）という判断は、二十一世紀に入り、さらに明らかな真実となったように思われる。

長年取り組んできた封建制度の問題にまとめをつけ、他方での課題に従事する間に芽生えた資本主義と科学主義にも結論を出しながら、先生の関心がきわめて精神的な方面へと向かっていることも、同時代に書かれたルネサンスについての論考から明らかとなる。それが『近代精神』（人間選書五 鎌倉文庫 一九四九「昭和二四年」）に収められた「文藝復興とヒューマニズム」である。一四名の錚々たる執筆者からなり、その前後は先生と関係深い、「京都学派」西谷啓治と下村寅太郎の文であり、西谷論文が最初に掲げら

れている。ルネサンスおよびヒューマニズムに先生が学術的にも歴史的にも深い関心を持ち続けられたことは、周知の事実である。没後に纏められた『世界史における現代』（創文社 一九八八〔平成二〇年〕には、『心』（一九六三〔昭和三八〕年）に連載された「ルネサンスの喪失——伝統とヒューマニズム」、ルネサンスの終末——伝統とヒューマニズム」が収録されている。中世に繰り返されたルネサンスがイタリア・ルネサンスを最後にもはやルネサンスがなくなったという視点から、近現代の精神史にメスを入れる叙述となっている。

ところで、『世界史における現代』には著作目録や論文等の頁があり、後世の者には役立つ情報を与えてくれようが、先の『近代精神』とその収録論文はどうしてか落ちていた。私には「文藝復興とヒューマニズム」は、今回ここに特に取り上げている先生の二著との時代的関連から言っても、また論調の学術の高さから考えても、無視できぬ文章のように感じられる。若いころ先生に教わった有難さに何度か気付かされることがあった。レオナルド学者裾分一弘先生と初めて学習院大学キャンパスでお会いしたとき、誰に習ったことがあるかと訊かれた体験もそのひとつである。鈴木先生の名を挙げたら、即座にこの論文から強い影響を受けたと言われたことは忘れ難い。「我々は産業革命をもったけれどもルネサンスはもたなかった。ルネサンスをもたずヒューマニズムを経過せずして而も我々は近代をもととしたのである。即ち精神の革命を経ずしてただ技

慈雲さんのこと

——拙著『ハンガリーのギリシア・カトリック教会——伝承と展望——』に寄せて——

慈雲尊者飲光（二七一八—一八〇四）の名に初めて接したのは、たしか二〇〇〇年のことだっただろう。同年秋季に渡辺照宏氏の『日本の仏教』（岩波新書、同二七頁参照）を読み、「梵学津梁」全一千巻のことを知った。サンسكريットを、インド・ヨーロッパ語文法の範疇で学習することしか知らなかったわたくしにとって、江戸時代鎖国下のわが国において、英独でのインド学勃興に先んじ、当時としては世界水準の梵学を集大成したとされる慈雲の名は、そのとき以降、脳裡を離れることがなかった。翌二〇〇一年の暮れ、慈雲ゆかりの寺、河内国高貴寺に初めて参拝したと記憶している。尊者が眠るといふ奥の院は見つけることができなくて、持参した花束を、落ち葉の積もる城内参道にそと置き、合掌して寺を後にした。

年が明けて二〇〇二年、高貴寺に宛て「梵学津梁」について尋ねる書簡をしたためた。すると間もなく、わたくしが勤務する大学の研究室に、京都大学の上山春平先生から直接お電話があった。二〇〇〇回遠忌の企画が進行中であり、まずは「慈雲尊者遠忌の会」に入りませんかという誘いであった。春になり「慈雲尊者二〇〇回遠忌の会」の会報第一号が届いた。会員名簿には、第二号にわたくし

術と生産の革命のみをもととしたのである」（五一頁）は「産業革命」の主題に関連する。「かかる「量の文明の」理念こそは、同じく近代的なものであるとはいえず、「質の文明理念たる」ヒューマニズムとは別の起源から発した第二の近代精神であり、却ってヒューマニズムをば没落へと追い込みつつある別個の近代精神であるといわなければならない。機械文明とマルクシズムはヒューマニズムの否定であつてもその発展ではない」（六一頁。「」内は根占の補い）。

「このころ」連載エッセーと同様、イタリア・ルネサンスと中世の関連性をブルダッハの視点で、またイタリア・ルネサンスの造形上の革新をブルクハルトの視点で書き進める。「近代はルネサンスから出発する。然しルネサンスが近代に属していたか如何かは別問題でなければならぬ」（六二頁）。これには先生らしい捻りが効いている。「美の根本理念を離れたところにルネサンスの正統的な理解は凡そ成り立ち得」（七一頁）ず、「ルネサンスが美と藝術の世紀であったという根本事実は動かされ得ない」（同頁）との指摘には、美術に言及することの少なかったクリステラーへの不満を述べられた、授業中の先生の姿が浮かんでくる。確かに、この哲學家には視覚芸術に関する発言が乏しく、己の専門分野を固守した。この点で先生はまさに対照的であり、時代精神をいつも問われていた。

（ねじめ・けんいち 学習院女子大学国際文化交流学部教授）

ルネサンス思想・文化史

■鈴木成高著『世界史における現代』

六三〇〇円

の名が掲載されている。

江戸時代中・後期の高僧慈雲は、わが国における梵字・悉曇学のアーカイヴとも言える「梵学津梁」を編纂するとともに、「正法律」による戒律復興運動、雲伝神道の創設など幅広い活動を展開して学徳兼備の名僧と謳われ、また純朴精神なその書風をもって知られる書家でもある。わたくしは学生時代に西洋古典学を専攻し、現在も本務校で西洋古典語を中心に講じている。ただ明治以降、いわゆる日本の「近代化」のなかで、教育体系に急ぎ取り込まれた西洋文化の受容のあり方に、かねてより少なからぬ疑問を抱いていた。西洋文化の受容は（キリシタン時代を別に）、明治期以降にしか始まらないのであろうか。空海の入唐（八〇四年）を初めとする先覚の事績は、外国文化の摂取であったに違いないにもかかわらず、明治期に西洋文化が流入し、西洋文化を積極的に摂取する必要性が叫ばれると、それまでの一千年以上におよぶ日本文化史は泡のように消え去ってしまうのであろうか。

「尊者の会」に入会した後、幸いにして二〇〇五年に本務校より在外研究の許可が下り、ハンガリー・ニーレジハーザ市のギリシア・カトリック神学院に約半年間起居した。宇宙論的時空間感覚を

秋山 学